

北吉田ノノメ古墳群発掘調査報告書

県土幹線軸道路整備事業に係る発掘調査報告書第1分冊(その1)

1992

石川県立埋蔵文化財センター

例　　言

- 1 本書は、石川県羽咋郡志賀町清水今江地内から同町北吉田地内にかけて所在する、北吉田遺跡群の発掘調査報告書である。そして、第1分冊（その1）として、北吉田ノノメ古墳群を報告する。
- 2 発掘調査は、能登有料道路西山I.Cから能登中核工業団地への連絡道路建設事業（県土幹線軸道路整備事業）に係る事前調査で、県土木部道路建設課の依頼を受けて石川県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 発掘調査は、諸般の都合から3回に分けておこない、第1次調査等々とする。第1次調査は当センター　主事　垣内光次郎を担当とし、昭和62年5月2日から8月5日に実施した。第2次調査は、当センター　嘱託　伊藤雅文を担当とし、昭和63年10月18日から12月14日に実施した。第3次調査は、当センター　主事　伊藤雅文を担当とし、平成元年5月15日から7月17日に実施した。
- 4 現地調査に際し、石橋克美（志賀町教育委員会）・吉田権（富来町教育委員会）の助言、助力を得た。また、宮下栄仁・浦元英俊・中村繁和・田畠弘の諸氏の援助を得た。感謝します。
- 5 出土遺物の大部分は、社団法人　石川県埋蔵文化財保存協会に整理を委託した。
- 6 本書の執筆・編集は、伊藤雅文がおこなった。
- 7 本書に収録した資料は、石川県立埋蔵文化財センターが保管している。

目　　次

第1章　　北吉田ノノメ古墳群の調査概要	
第1節　調査の経過	1
第2節　調査の概要	2
第2章　　遺構と遺物	
第1節　北吉田ノノメ1号墳	8
第2節　北吉田ノノメ2号墳	10
第3節　北吉田ノノメ3号墳	13
第4節　北吉田ノノメ4号墳	20
第5節　北吉田ノノメ5号墳	24
第6節　北吉田ノノメ6号墳	26
第3章　　まとめ	

第1章 北吉田ノノメ古墳群の調査概要

第1節 調査の経過

第1次調査（昭和62年9月29日～10月14日）

垣内光次郎を担当とした。9月29日に北吉田ノノメ1・2号墳の表土除去の着手。10月6日に表土除去がほぼ終り、流土の除去作業に入る。10月12日には1号墳の周溝と思われる部分を掘削。12月までに1・2号墳の調査を終了する予定であったが、押水町竹生野テラヤシキ遺跡の発掘を実施することになったので、急遽調査を中断させて、竹生野テラヤシキ遺跡の調査に入ることになった。そして、13・14日に残務整理をおこない現場を撤収した。

第2次調査（昭和63年10月18日～12月14日）

昨年度調査の継続なので、1・2号墳を対象とした。伊藤雅文を担当とし、富来町から長期研修生として当センターに派遣されていた吉田権氏も発掘に従事した。そして本調査は、北吉田ノノメ古墳群が所在する丘陵裾に位置する北吉田ノノメ遺跡の発掘調査と一部並行して実施した。来年度調査予定地の事前作業も今次調査でおこなった。つまり、3～6号墳の樹木の伐採を9月21日から始め、10月14日に調査前の航空写真測量を実施した。

今次発掘調査に係る作業は、10月18日に1・2号墳にトラバース杭を設定し、19日より風化した土層の除去。20日には翌年度調査区（3～6号墳）の杭を設定する。11月4日から精査に入り、墓坑の痕跡を追及するも手懸りはない。9日にだめ押しの調査の断ち割りを入れる。11月28日に本年初冠雪。12月1日から翌年度調査区の表土除去、および流土も部分的に除去作業に入る。それまでに1・2号墳のアゼの除去および平板による地山測量をほぼ完了する。13日には掘削完了の写真を撮影し、14日に器材撤収を行なう。

第3次調査（平成元年5月15日～7月17日）

前年度表土除去を実施した3～6号墳の表層はかなり風化しているので、精査しても土の違いがよくわからない。まず5号墳の方から調査を開始し、5月22日には概ね周溝を掘り上げ、次に4号墳の調査に力を注ぐ。表土下約10cmで鉄刀が出土してしまったが、5月30日になんとか埋葬施設と考えられる輪郭を確認した。6月1日に4号墳主体部出土鉄器を取り上げ、3号墳の調査にかかる。6月7日に6号墳を想定した。12日に6号墳の墓坑状落込みを検出、掘削。3号墳の精査も継続しつつ、27日まで各古墳の流土除去。7月4日より主体部掘削を開始し、同時に5号墳の盛土除去もおこなう。6日に木棺内より遺物出土。11日には遺物をとりあげ、主体部の断ち割りをおこなう。以後平板測量や全体写真撮影をおこない、17日に器材を撤去して調査を終了する。

遺物整理作業

調査終了直後、まず鉄製品の銷落としをおこない、その実測図も作成した。それ以外の遺物の整理作業は、社団法人 石川県埋蔵文化財保存協会に委託した。作業は、北吉田ノノメ遺跡やオ

モクラヤチ遺跡とともに一括しておこなった。報告書作成作業は、遺物整理作業の終了後からおこない、主に、田畠弘・中村繁和氏の助力を得た。

第2節 調査の概要



第1図 北吉田ノノメ古墳群と路線範囲（数字は古墳番号）

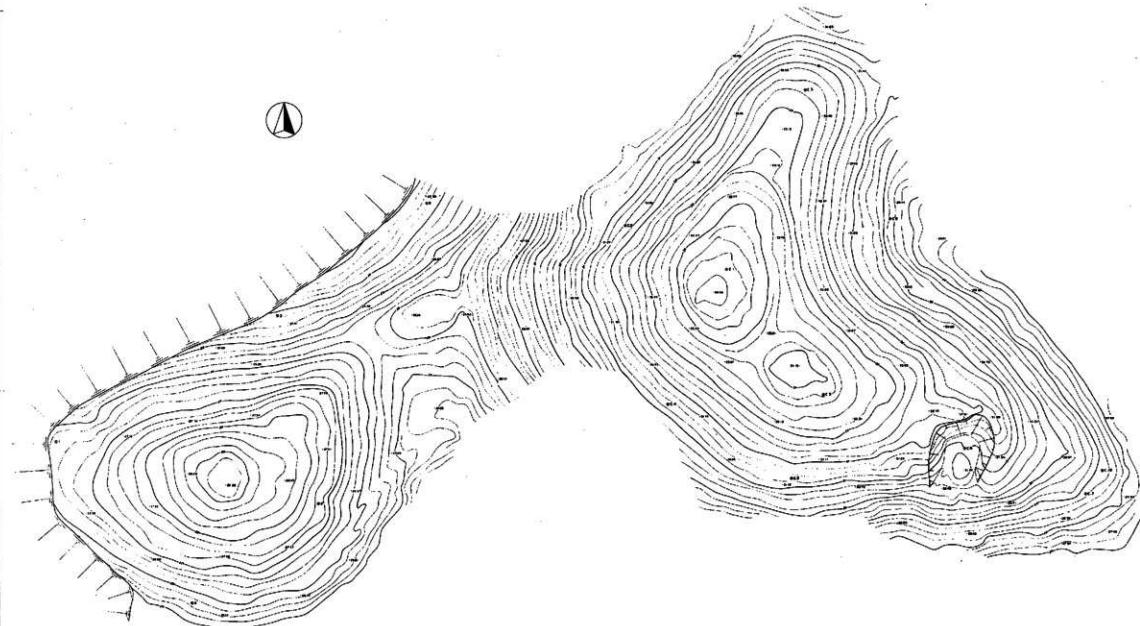
北吉田ノノメ古墳群は、前方後円墳1基（3号墳）を含む6基で構成されている。丘陵の最高所（標高約34m）に3号墳が、それに隣接するように6号墳が北側に、4号墳が南東にある。5号墳は、4号墳の東の傾斜変換点際に位置している。1・2号墳は、西に派生する尾根上にあり、標高約29mと3号墳などよりも一段低くなっている。

6号墳の東側は、すぐに傾斜が変化して急斜面となり、鞍部に至って古墳状の隆起が存在する。しかしその隆起が不定形なことや谷の一番狭いところに面するという位置関係から、古墳と断定することはできない。さらに、5号墳の東側は急斜面になっているので、古墳を築造することはない。1号墳の西側は工事によって既に削られているものの、尾根筋が最も痩せるところにあたるという周囲の地形から、古墳の存在は無いと判断できる。以上より、北吉田ノノメ古墳群は、6基の古墳から構成されていると考え、古墳群全体を発掘調査したことになる。

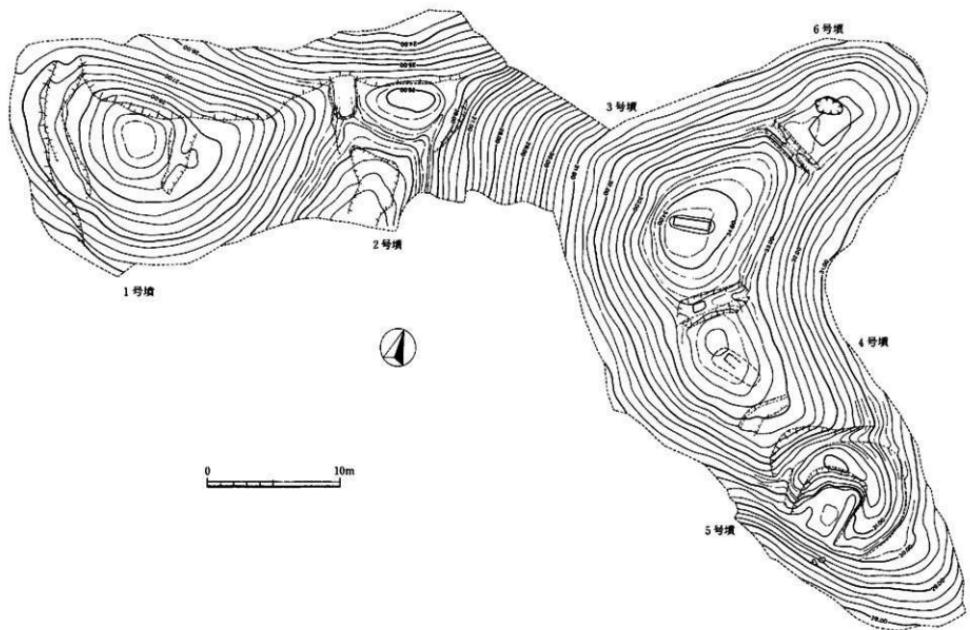
北吉田ノノメ古墳群の古墳は、いずれも墳丘裾が不明確である。周溝を確認できた1・2・5号墳が円墳であることがわかるが、4・6号墳は方墳に近い形をしている。さらに3号墳は、前

北吉田ノノメ古墳群

Ⓐ



第2図 北吉田ノノメ古墳群測量図(調査前)



第3図 北吉田ノノメ古墳群全体図（調査後）

方後円墳と考えられるものの非常に不明確である。土層断面を細かく観察しても、墳丘裾を作るカット面や周溝を確認できなかったアゼも少なからずある。このように墳丘形態の不明確さは、墳丘周囲の土砂の流出が原因と考えられるとともに、尾根筋から外れる部分の墳丘裾を、古墳築造当初から明確に作っていなかったことも考えられる。

本古墳群が立地する丘陵の表層は、粘質土となっているものの、砂質土的で簡単に土が流れ出す。実際、調査中に雨に逢うと、どんどん土が流される。ひと冬おいたところでは調査区の端に厚く土が堆積している状態である。つまり、古墳築造によって、それまで地表を保護していた表土層が一時的になくなることから、土砂の流出が激しくなる。そのために簡単な施設で区画していたと思われる尾根斜面の墳丘裾が失われたと考えられる。

本古墳群の築造時期は、5世紀前半から～6世紀後半にまで及んでいる。そして、古墳群全体を発掘したことによって、本地域の古墳の構造や地域社会構造を知る上に、非常に重要な資料を提供する。

古墳番号	墳形	規模 (m)	埋葬施設と規模 (棺長×棺幅m)	出土遺物		時期 (世紀)	備考
				主体部	墳丘		
1	円	13			須恵器	5後	TK47型式
2	円	7.5		晉王(1)	須恵器・土師器	6前	MT15型式
3	前方後円	25.6	木棺直葬 (2.6×0.65)	勾玉(4)、丸玉(1)、算盤玉(5)、ガラス小玉(2)、臼玉(4)、不明小鉄器	土師器	5前～中	
4	方	8	木棺直葬	刀(1)、鐵鏹(4)、刀子(1)	土師器	5前～中	3号墳より後出
5	円	9	箱式石棺	刀子(1)	須恵器・土師器	6後	TK43型式
6	不明	10				6中(?)	3号墳の再利用

第1表 北吉田ノノメ古墳群一覧表



第2次調査調査風景（2号墳北側）

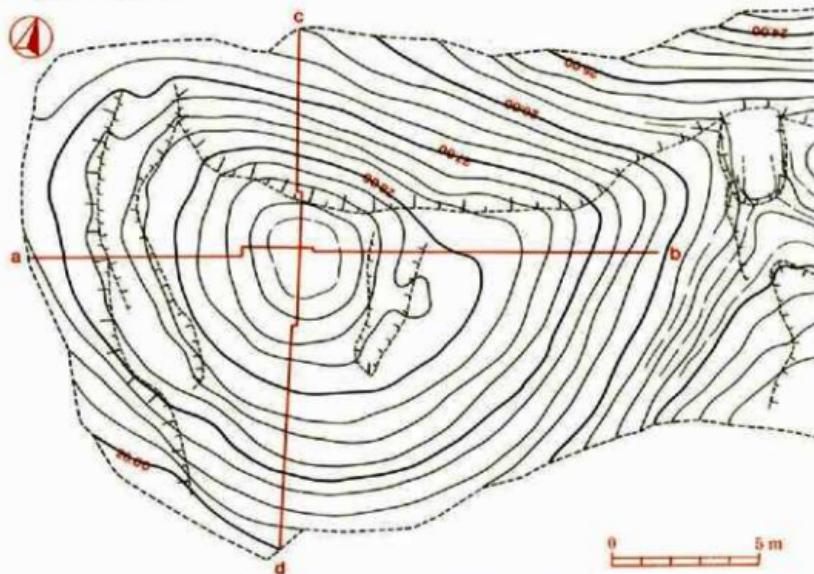


第3次調査 3号墳墓前祭風景

第2章 遺構と遺物

第1節 北吉田ノノメ1号墳

a 墓丘・埋葬施設



第4図 北吉田ノノメ1号墳墳丘図 (1/200)

丘陵最高所から西に下った狭い尾根上に位置する。東の尾根との鞍部にあたるもの、その地点で最も高い所に築造されている。尾根の北側は、崩落によって大きく削られている他、全体的に土の流出が激しく、墳丘の遺存状態は必ずしも良いとはいえない。1号墳は直径9m前後、あるいは約13mの墳丘を有する円墳と考えられる。

1号墳は尾根筋にあたる東西方向に、いわゆる周溝を掘ることによって墳丘を画している。西側で幅1.5m前後、東側で1~2mを測り非常に浅いものである。これらは、溝のような形となっておらず、墳丘周囲に平坦面を作るためにし字状に削られた状態である。つまり、断面観察用アゼから（第7図a-b断面図）見ると、西側周溝の墳丘外側の溝肩が堤状を呈し、同溝というよりも墳丘構築時の地山成形のカット面と思われる。東側についても同様で、地山をカットすることによって、やや幅広の面をつくっている。そして墳丘裾は、西側では標高27.50m、東側で28.3mあたりである。

また東側周溝から約3mの所でも地山の見かけの隆起が認められる。東溝の埋土は暗赤灰色砂

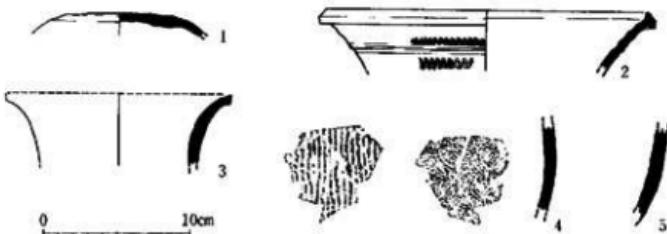
質土で、それより東の埋土は暗灰黄色砂質土という違いが認められる。後者の土は墳丘流土とおもわれ、他のアゼでも認められる。前者の土は墳丘流土と異なるので、墳丘盛土の可能性がある。そして仮に東の地山の隆起まで墳丘と考えるならば、直径約13mの円墳となり、東側の墳丘幅は標高27.7m付近となる。これに墳丘幅を求める方が、より妥当であろう。

現状の墳丘基底部と墳頂との比高差は、西で1.5m、東溝で0.9m（東の地山の上がりでは1.3m）と低い。かなりの封土が流失しているものと考えられる。墳頂部も表土直下に地山があり、僅かに暗赤褐色砂質土の盛土が薄くあるにすぎない。

墳丘流土中に小破片となった土器が出土している。主に墳丘西から南西側にかけて多く出土しているようである。墳頂に直径30cm前後、深さ20cmのピットがあり、中から須恵器小片が出土している。これは、後世の擾乱である。

なお、埋葬施設は確認できなかったので、既に流失しているものと考えられる。そして、木棺直葬と推定される。

b 出土遺物



第5図 北吉田ノノメ1号墳出土遺物

全て須恵器で、土師器の出土はない。

壺（第5図1）

壺蓋の天井部である。12cm程度の口径となると思われる。外面は、全面にわたって回転ヘラケズリが施され、内面はナデ。内外面共に灰色を呈する。微砂粒を含むものの、胎土は密で焼成もよく堅緻である。

壺（第5図2・3・5）

いずれも広口壺である。2は、幅広の口縁端部をもち、2条の沈線をはさんで細かい波状文が施されている。灰色を呈し、1と同じ胎土・焼成である。3は、胎土が悪く、4とともに海綿骨片を多く含む。焼成は甘く、外面が暗赤灰色、内面が灰色を呈する。5は壺の底部で外面下半にヘラケズリ、内面にナデが施されている。胎土は砂粒を多く含んでおり焼成も甘い。断面淡灰色、内外面灰色を呈する。

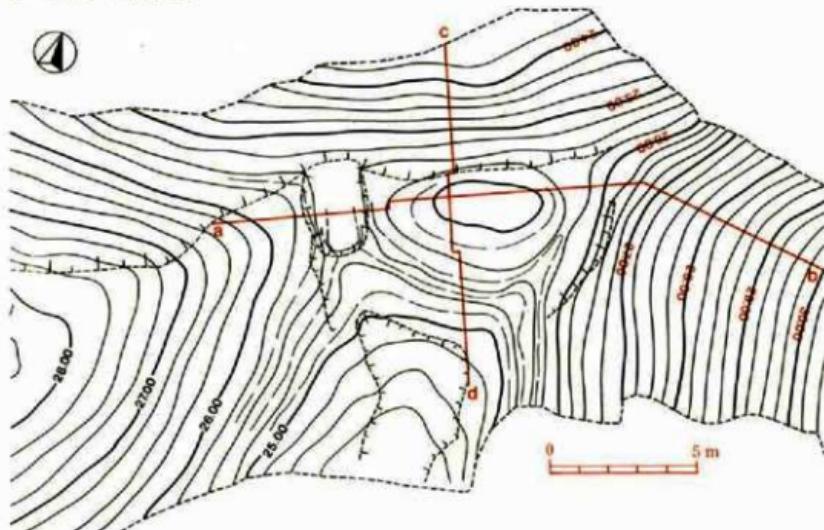
甌（第5図4）

4は3と同じ土器の顔を持っている。胎土は砂粒や海綿骨片を多く含み、焼成も甘い。外面は

暗赤灰色、内面は灰色を呈する。当て具痕としての同心円文が細かいのが特徴である。

第2節 北吉田ノノメ2号墳

a 墓丘・埋葬施設



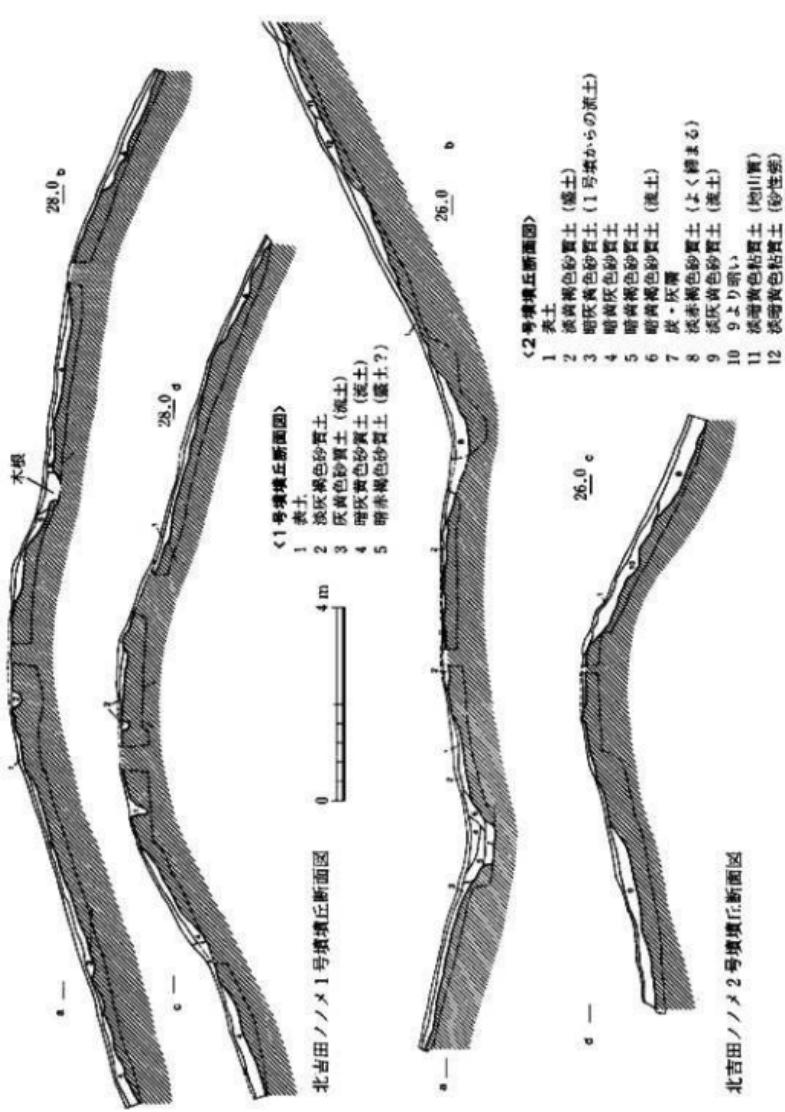
第6図 北吉田ノノメ2号墳墳丘図

2号墳は、3号墳と1号墳との間の、極めて限られた空間に古墳を築造している。しかも3号墳からの尾根の斜面が迫っていることを考えると、その立地は非常に悪い。また1号墳と同様、北側が土砂の崩落によって大きく削られている。

1号墳と同じように、尾根筋である東西方向にいわゆる周溝が作られている。つまり明確な溝をなさずに斜面を斜めにカットすることによって墳丘を画する構築方法である。1号墳に比べて墳丘基底部の遺存がよく、墳丘東西とも標高25.7m付近に墳丘裾がくる。(また墳丘南側は標高25.25mで傾斜が変り緩やかとなるところから、この周囲に墳丘裾がくると考えられる。)これによって推定される墳丘規模は直径7.5mの円墳である。

盛土は、墳丘の東西に僅かに認められ、粘性の強い淡黄褐色砂質土である。墳頂部を中心に繰りのない淡黄褐色砂質土層があり、その中から土器片が少數出土している。1号墳でもそうだが、前年の10月に表土のみ除去したために土の表層が風化しているので、繰りのない淡黄褐色砂質土層が盛土なのかそれとも攪乱を受けている土なのか判別できなかった。

西側のカット面には幅2.2m、長さ約2mの土坑がある。1号墳からの流土層を切るようにある。底にはほぼ水平に堆積している厚さ20cmの炭層があり、2号墳からの流土である淡黄褐色砂質土、次に1号墳方向からの流土である淡黄褐色砂質土、暗黄灰色砂質土が堆積している。この



第7図 北吉田ノメ1・2号堤壙丘土層図

ような遺構の切込み位置や堆積状況から見て、2号墳に伴うものと考えられる。

遺物は墳丘の周囲から点々と出ているが、北側の墳丘崩壊面で土師器壺（第9図7～9）、同壺（4・5）が、あたかもすり落ちたような状況で出土した。これらは流土層（淡暗灰黄色砂質土）の中位より出土している。そして、主体部に關係する土器群と考えることができる。

この土器群の存在から、埋葬施設は木棺直葬と考えられるものの、その痕跡を確認できなかった。出土土器群が、墓坑上面におかれた供獻土器群と考えると、埋葬施設は墳丘の崩落によって既に失われていると考えられる。

なお、第3次調査の清掃中に、墳丘南の流土の掘り残しの層から管玉1点が出土した。本墳に伴う遺物と推定され、ある程度の搅乱を受けていたと考えられる。

b 出土遺物

管玉

直径6mm、長さ23.5mmを測る。いわゆる緑色凝灰岩であるが、硬質で淡緑色を呈する。層理の縞が見られる。穿孔は両側からおこなわれている。



須恵器 壺（第9図1・2）

1は壺蓋で、口径12.2cm、器高4.2cm（推定）を測る。口縁端部内面は明確な段をなし、小さく外方に突出し、後も鋭く突出する。後近くまでヘラケズリが施されている。緻密な胎土で、内外面とも灰色を呈する。2は壺身で、受部径12.1cm、器高3.9cm（推定）を測る。立ち上りはほぼ垂直で、口縁端部は鋭く段をなす。1とセットになるものである。



第8図 2号
墳出土管玉

須恵器 虹（第9図3）

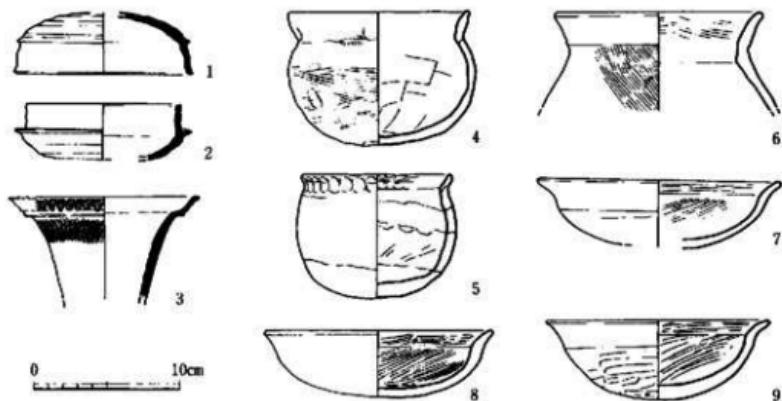
口径13.0cm、現存高7cmを測る。屈曲した口縁部の外面と頸部上半に波状文が施されている。胎土は緻密で、灰色を呈し硬質である。

土師器 壺（第9図4～6）

4は口径12.4cm、器高9.2cmを測る。綺りのない口頸部からやや潰れた球形の体部を持つ。器壁は比較的厚い。外面は指頭圧痕が多く残しハケメが施され、内面は丁寧な板ナデが施されている。5は口径10.1cm、器高8.5cmを測る。口頸部は、指で摘み出すようにして作られている。器壁は厚く作りも粗い。粘土紐の接合痕が多く残し、ハケメ等は見られずナデによって仕上げられている。6は口径13.8cmを測る。有段口縁の名残りをとどめるかのような、段のような棱を持つ口縁部である。内外面ハケメが施されている。4～6の胎土は、いずれも土師器椀と似ているものの、より砂粒が多く入る傾向にある。

土師器 椿（第9図7～9）

口径は9が15.0、9が16.2、8が15.5cmと8が若干大きい。そして器高は4.5から5.5cmである。いずれもほぼ同じ「型」でとらえることができる。すなわち、やや潰れた鉢状を呈し、外方に屈曲する口縁を持つ。内面にも屈曲による段が生じている。8・9が内外面ヘラミガキで、7は内面ヘラミガキ、外面ヘラケズリとなっている。明確な底部を持っていない。胎土もまた同じで、



第9図 北吉田ノノメ2号墳出土遺物 (8,9のトーンは内黒を示す)

雲母片を多く含み海綿骨片もみられる。焼成はよく、純い橙色を呈する。

第3節 北吉田ノノメ3号墳

a 墳丘

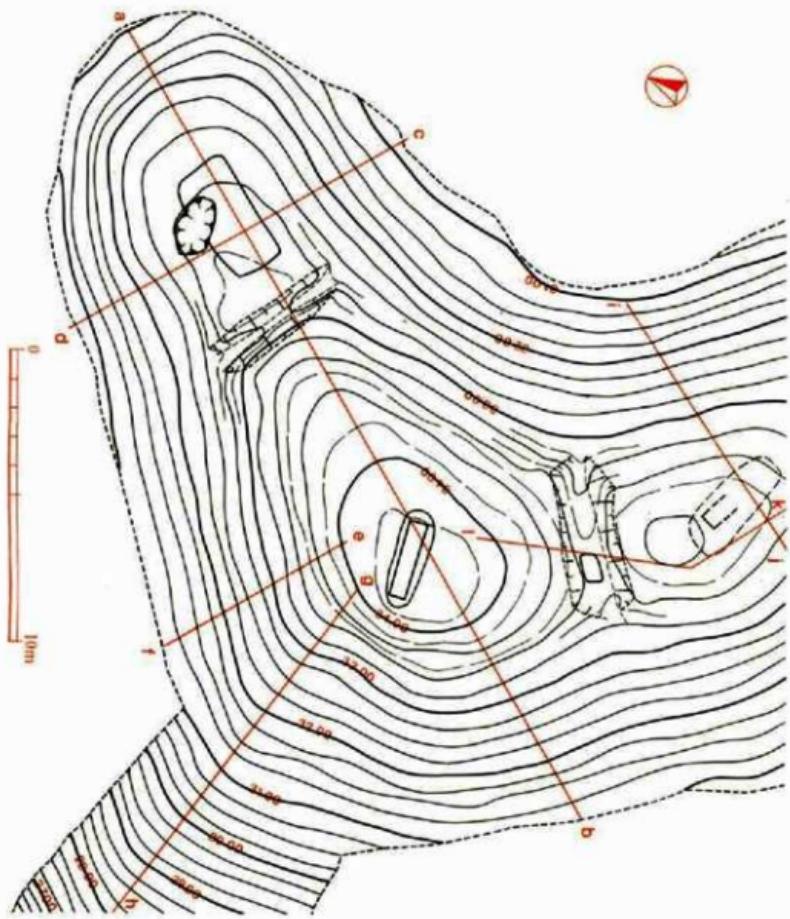
調査当初は円墳ではないかと考えていたが、調査が進むうちに前方後円墳の可能性も出てきた。本報告では、総合的に考えて前方後円墳の可能性を積極的に支持し、それを前提に記述する。

3号墳は、古墳群のある丘陵尾根上の最も高いところに位置している。つまり、最も良好な立地である。全長25.6m、後円部径14m、くびれ部幅7.5m、前方部長11.6m、同幅10mを測る小形の前方後円墳である。しかしながら、後円部からくびれ部にかけて封土の流失が激しく、明確な前方後円形を呈していない。

3号墳は墳頂を中心に盛土が確認され、群中でも比較的良好な遺存状況である。盛土は、砂質の強い淡黄褐色粘質土系の土が前方部から後円部にかけて見られ、部分的に暗灰褐色粘質土がある。調査中は、この暗灰褐色粘質土を3号墳からの流土と考えていたが、その下層に位置づけられる盛土（淡黄褐色粘質土）が、前方後円墳のほぼ全面に見られることから、本墳に伴う盛土と判断した。

墳丘南側には、暗黄灰色粘質土の流土が堆積している。標高33.5m付近で地山の隆起が認められ墳丘裾にあたると考えられる。西側も淡黄褐色あるいは淡黄灰色粘質土系で、前方部においても同じである。土層断面図（第11図g-h断面）の標高33.1mで、地山の傾斜の変換が認められるが、これは木根による擾乱によるものである。

第6節で再述するが、前方部を利用して6号墳が造られた考えているので、くびれ部を横断する周溝はその時のものと考えられる。

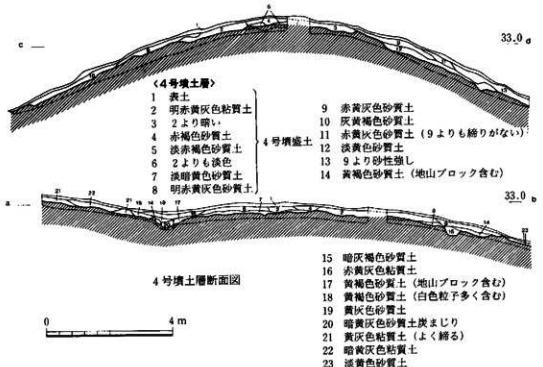
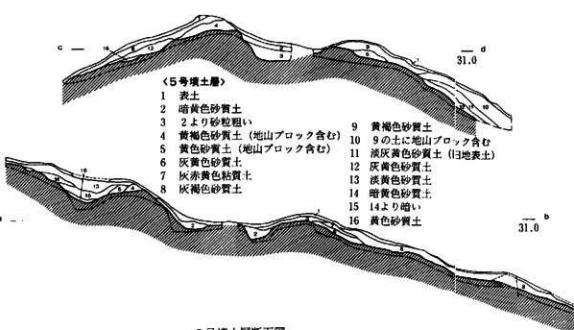
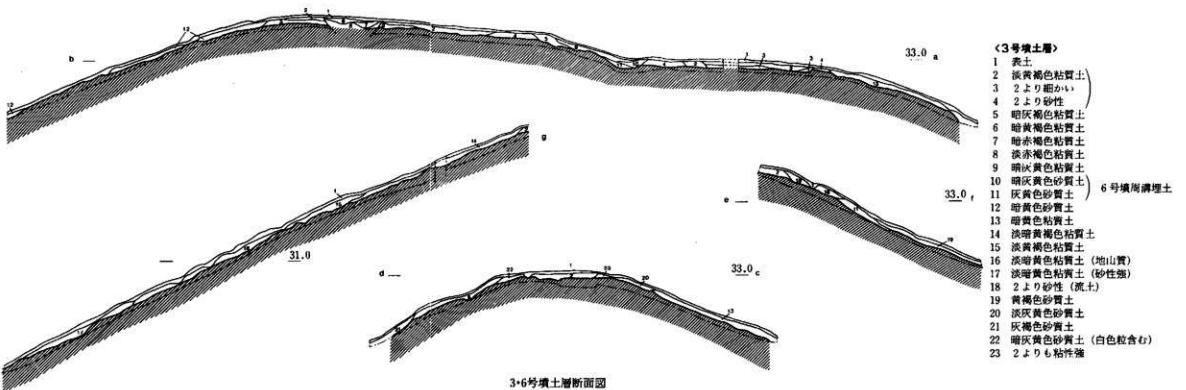


第10図 北吉田ノノメ3号墳埴丘図 (1/200)

b 埋葬施設・遺物出土状況

後円部中央よりやや南で、長さ3.4m、幅1.14mのいびつな長方形の墓坑中央に、長さ2.6m、幅0.65mの組合式木棺を内蔵する埋葬施設を検出した。埋葬施設は、埴丘主軸に斜交し、ほぼ東西方向の軸をもつ。墓坑の切込み位置は、現状の盛土の最上部である。墓坑は舟底状を呈し、木棺の小口のあたりから墓坑斜面になるようである。そして、木棺埋設部分のみ若干掘り凹めて段掘り状の墓坑を呈する。また、墓坑底は西に向かって下りの傾斜があるので、西小口は東小口よりも8cm低くなっている。

西小口の土層観察用アゼ（第12図a-b断面）で、7cmの厚みのある棺の痕跡を確認した。小



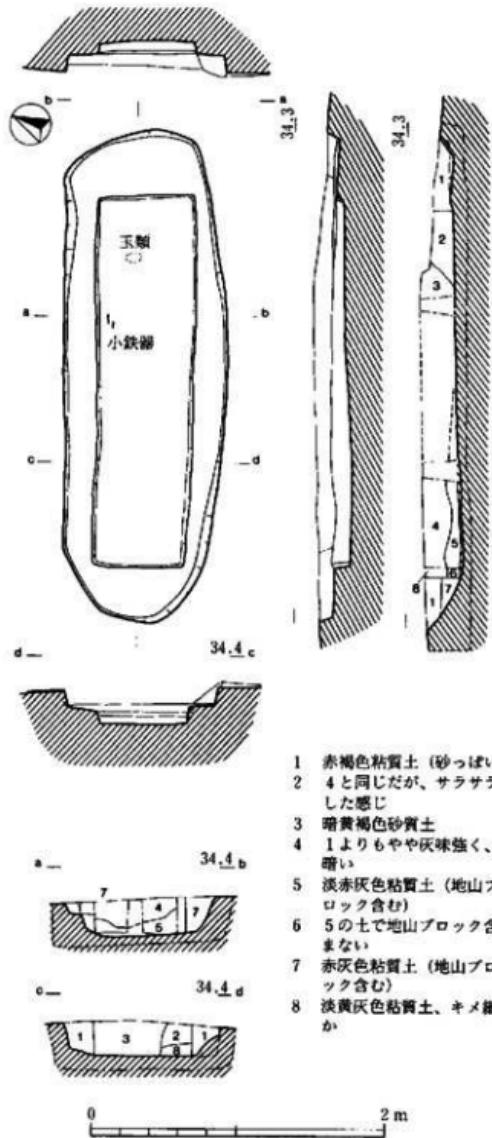
第11区 北吉田ノメ3~6号填土層断面図

口板が墓坑底に接していることから、小口板は底板の上にのるタイプではなく横につくタイプで、現地で組み立てられる木棺であることがあることがわかる。

棺内には、木棺の腐朽に伴い落ち込んだ墓坑埋土が堆積している。まず、棺内東小口付近から土が流入し、そのために西小口板が倒れずにいたようである。墓坑埋土は、最上層に暗黄褐色粘質土、赤褐色粘質土、赤灰色粘質土で、棺内埋土もほぼ同じである。墓坑底には、部分的に地山ブロックが混入した上が厚さ10cm前後で見られる。これは、墓坑を掘削した時の最下部になり、その掘削による地山擾乱の状況を示すものであろう。

副葬遺物は、棺内東小口付近で首飾り一連と棺内中央近くで不明小鉄器(針・針入れ?)が出土している。

玉群は、小口から40cm西に離れて、勾玉4、丸玉1、算盤玉5、ガラス小玉2、臼玉27で構成されている。メノウ製勾玉の腹部に挟まるようにコハク製丸玉があり、メノウ製勾玉の背と向きあうように滑石製勾玉が1個ある。この周間に、白玉が数個一群となっている。それから約7cm南に勾玉2個と臼玉2個が一群となっている。このような出土状況から具体的な首飾りの構成を知ることは困難なもの



第12図 北吉田ノノメ3号墳主体部実測図(1/40)

の、丸玉を中心として勾玉がそれぞれ等間隔に配置され、その間に臼玉をめぐらせているものと考えられる。その際、メノウ製勾玉とコハク製丸玉がが「赤色の玉」であるので、玉を連ねる時に意識された可能性がある。

さらに、玉群から40cm西の北長側板付近から小鉄器が出土している。アゼ際の断ち割り掘削時に出土したので、その時の不注意から詳しい状態は分らない。

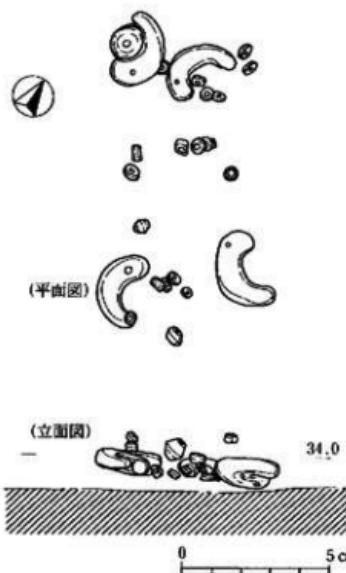
以上より、被葬者は首飾りを着け、頭を西に向けて埋葬されていたことがわかる。

c 出土遺物

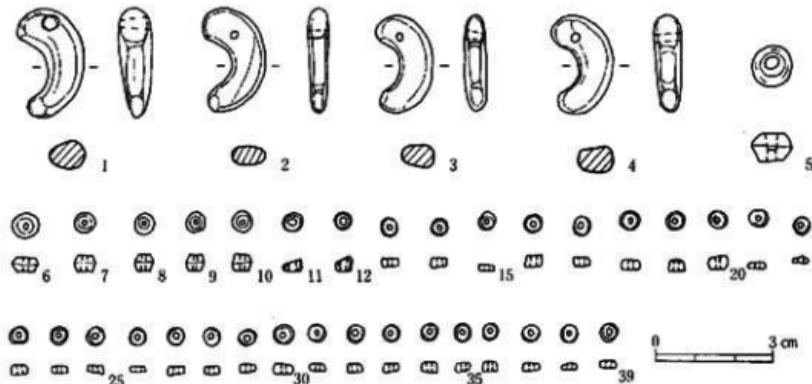
3・4号墳間の周構内出土土器は、第4節の4号墳で扱うこととする。

勾玉（第14図1～4）

1はメノウ製である。全長28.0mm、腹部幅9.5mmを測り片側から穿孔されている。頭部は大きく、C字形を呈し、やや細めの尾部に至る。研磨痕を粗く残し、丁寧な作りではない。2～4は滑石製である。いずれも片側から穿孔されているものの、両側の孔径に大きな違いがない。全長は、25mm前後とよく似た大きさである。体部には、明瞭な面をもち偏平な造りとなっている。いずれもC字形を呈する。丁寧に研磨が施されている。



第13図 北吉田ノノメ3号墳玉類出土状況



第14図 北吉田ノノメ3号墳出土玉類

丸玉（第14図5）

直径2.05mm、長さ12.5mmを測るコハク製である。上下に6mm前後の面をもち、両側から穿孔されている。ほぼ中央に不明瞭な稜線が走る。

算盤玉（第14図6～10）

5個出土している。直径5.5mm前後、長さ4.0～4.5mmを測る小型のもので、すべて滑石製品である。白玉に近い形態のもの（6）や縦長のものなど多様な形状を示す。しかし上下両端には明瞭な面が認められ、体部に稜線を持つ点から滑石白玉とは区別されるものである。

ガラス玉（第14図11・12）

2個出土している。ネイビーブルーの色調である。上下両端に面を持っていている。

臼玉（第14図13～39）

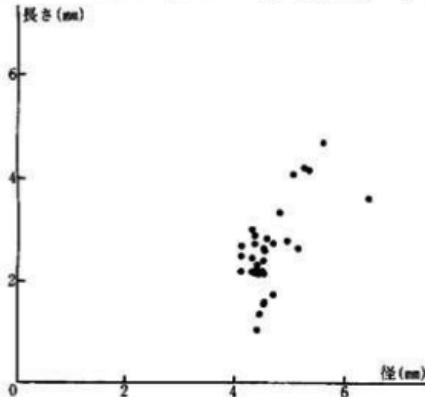
滑石製白玉で、27個出土している。側面中央に鈍い稜の走るものや偏平に近いものなどの形態がある。そして一方の端面を欠損しているものが多い。これは穿孔時の破損によるもので、滑石製臼玉によく見られるものである。

不明鉄器（第15図）

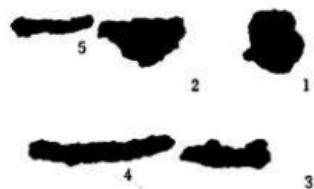
鉄針（3～5）とその鉄製容器（針入れ1・2）と考えられるが断定できない。針は2本あると思われる。鉄針は、鏽化によって膨れ上がっているものの直径1mm強を測るようである。もともとの長さはわからない。針入れは幅約11mmを測り現状でL字状を呈する。接合できないが、二つの部品から考えると円筒状を呈するものと推定できる。

須恵器 瓢（第17図1）

口縁部のみ遺存し、口径11.1cmを測る。やや厚手の作りで、口縁端部は面をなし外方に突出気味である。



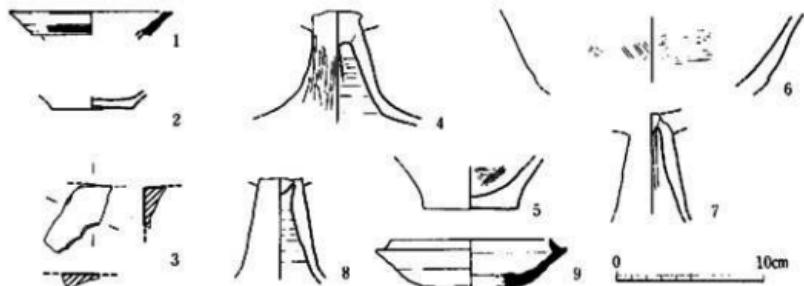
第16図 北吉田ノノメ3号墳出土小玉散布図
(臼玉とガラス玉)



第15図 北吉田ノノメ3号墳出土
不明鉄器

番	長さ	径	重量	番	長さ	径	重量
6	4.2	5.25	0.2	23	2.2	4.3	0.1
7	4.7	5.6	0.2	24	3.0	4.3	0.1
8	4.1	5.05	0.2	25	2.2	4.5	0.1
9	3.6	6.45	0.2	26	2.8	4.95	0.1
10	4.15	5.35	0.2	27	2.65	4.5	0.1
11	2.85	4.58	0.1	28	2.2	4.5	0.1
12	2.9	4.35	0.1	29	1.05	4.4	0.1
13	2.45	4.3	0.1	30	1.6	4.55	0.1
14	3.35	4.8	0.1	31	2.15	4.4	0.1
15	2.75	4.7	0.1	32	2.15	4.55	0.1
16	1.75	4.7	0.1	33	2.5	4.1	0.1
17	1.35	4.45	0.1	34	2.35	4.4	0.1
18	2.2	4.1	0.1	35	2.7	4.1	0.1
19	1.55	4.5	0.1	36	2.15	4.45	0.1
20	2.4	4.5	0.1	37	2.75	4.35	0.1
21	2.3	4.4	0.1	38	2.6	4.55	0.1
22	2.2	4.55	0.1	39	2.65	5.15	0.1

第2表 北吉田ノノメ3号墳出土小玉計測表



第17図 北吉田ノノメ3・4号墳出土遺物

口縁下端の圓線は鋭く全体的にきれいな作りである。整った波状文が施されている。

土師器 高杯（第17図4）

脚柱部のみ遺存している。4号墳に面する墳丘斜面から出土している。接合する破片が4号墳間との周溝中からも出土しているので、本墳に確実に伴うものといえないものの、その蓋然性は少くないと考えている。全体的に大作りで脚柱部から緩やかに屈曲して大きく開く据にいたる。外面はヘラミガキ、内面は横方向のケズリで、一気にケズリ作業を行なっている。鈍い橙色を呈し、砂粒と海綿骨片を含んでいる。

土師器 小皿（第17図2）

底径5.6cm、同厚さ5mmを測る中世の土師器小皿の底部である。全体的に摩滅が著しいが、底部が平滑、上げ底氣味であることから、糸切りによるものと考えられる。鈍い橙色を呈し、砂粒を多く含む。

砥石（第17図3）

3号墳の表土から出土した。よく使い込まれている。時期不明である。

第4節 北吉田ノノメ4号墳

a 墳丘

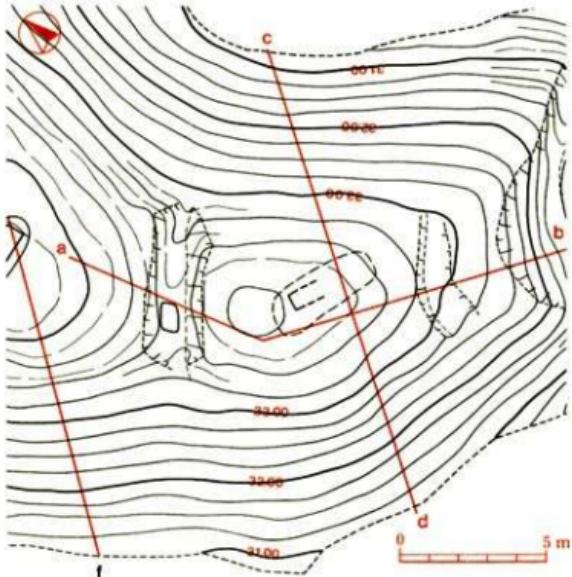
3号墳から南東に伸びる支尾根上に4・5号墳がある。4号墳は、3号墳の後円部に隣接し、一部分3号墳の墳丘を切っているようである。尾根筋方向で、一辺約8mの方形墳である。

墳丘は、尾根筋に直交する2つの周溝によって画されている。尾根の斜面でも墳丘を画するなんらかの施工が考えられるが、痕跡を見出すことができなかった。

北側周溝は幅2.4m、深さ54cm、南側周溝は1.8m、深さ25cmを測る。南側周溝の方が浅く、平面形も不明瞭でつくりも貧弱である。これは、1号墳でみられるような地山カットによる「L」状の周溝形態に近い。北側周溝には3号墳からの流土である黄褐色砂質土が堆積し、その層を切るように長さ1m、幅55cmの土坑状落込みが掘り込まれている。埋土は炭混じりの暗黃灰色砂質土で、2号墳の周溝内に掘り込まれている土坑に類似する。（この土坑は、4号墳築造後まもなくして掘り込まれたと考えられる。創造をたくましくすれば、葬送儀礼で焚かれた火炎の痕跡であろうか。）南の周溝外に地山の小さな隆起が認められ「L」状に掘り込まれた周溝の上端と判

断できよう。その埋土は黄褐色砂質土である（上面には4号墳からの流土である赤黃灰色粘質土が覆っている）。

盛土は、3号墳と同じ程度に残りが良く、約30cmの厚さで遺存していた。盛土は、明赤黃灰色粘質土・明黃灰色粘質土で、部分的に地山ブロックを含む。遺存していた木棺底のレベルから考えると、現状より1m程度高い墳丘を持っていたことが予想され、墳頂部の封土の流出がはなはだしいことがわかる。そのため、墳丘西側には厚く流土が堆積している。



第18図 北吉田ノノメ4号墳墳丘図 (1/200)

b 埋葬施設・遺物出土状況

墳頂のほぼ中央で、墳丘主軸にやや斜交する埋葬施設を検出した。木棺の西小口部のみ確認し、全体の規模は分からぬ。調査作業段取上、昭和63年度に表土の除去をおこない翌年度に精査を行なったので、埋葬施設検出時には土が風化してぼろぼろになっており、細かな土の観察ができなかった。つまり、墓坑の輪郭を検出できなかった他、検出木棺ラインにあまり自信がないことを断っておきたい。そして、平成元年度の表層除去の時に刀が出土したために、埋葬施設の存在が知れたのである。

墓坑の輪郭は不明である。墳丘アゼで墓坑らしい落込みを確認したもの、平面的にその痕跡を確認することができなかった。ただし、第18図でこの墓坑の推定を破線で示した。墓坑内埋土と考えられるものは赤褐色粘質土系で地山と非常によくしている。土質も同じで、乾燥するところぼろぼろになるので、墓坑や木棺の検出は非常に難しい作業であった。木棺しか検出できなかったのは、段掘りになった墓坑を呈していたためと推測される。つまり墓坑下部を見かけの木棺底として確認したものと考えられる。3号墳の墓坑も段掘り気味であるので、その蓋然性は大きい。

木棺は組合式木棺である。そして、東から西に向かって緩やかに傾斜していることが、刀の出土状況からわかる。木棺は、現状で幅0.6m、長さ0.7mを測り、復元すると2m強の長さがあったと考えられ、3号墳よりも一回り小さいようである。

遺物は、西小口に集中して見つかった。出土鉄鎌・刀は、棺内に副葬されたものである。小口

から30cm内のところで鉄鎌4本が出土している。刃先の向いている方向はまちまちで、ある程度の混乱が予想される。鉄鎌の表面には胡籠片と考えられる漆膜が付着していることから、埋葬時には胡籠にまとめて収められていたと思われる。刀は木棺の中央で鉄鎌群からやや離れて切っ先を西に向いている。木棺の傾きとおなじように西に向かって傾斜しているが、土圧による破損が著しく多数折れている。鞘尻と柄尻のレベル差は9cm程あるが、木棺底板の不均衡な腐朽に伴う落込みによって、このような大きな高低差ができたとも考えられる。

c 出土遺物

刀（第21図）

表土下わずかから出土したので全体的な遺存状況は悪く、また土圧によりかなり歪んでいる。全長86cm、刃部長70cm、刃部幅10mmを測る。平造りの通有の刀で全体的に小振りだが厚い造りである。刃部および茎部には木質が遺存している。茎部中央に目釘穴を1ヶ所確認した。鞘口の木質の残りは良い。部分的に柄に巻かれた繊維の痕跡が遺存している。茎尻は、斜めにカットされた形状を呈している。

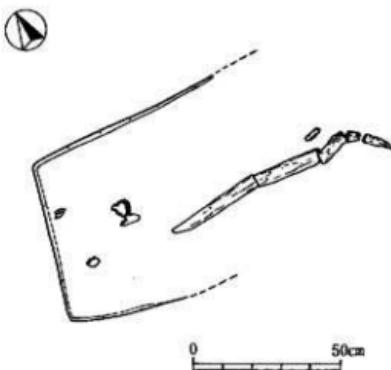
刀子（第20図1）

刃部のほとんどを欠損し茎部のみ遺存している。刃部はおそらく7cm程度の長さとなるだろう。茎部には厚く木質が遺存し、また鋸化の程度も激しいので、目釘穴の痕跡を確認することはできなかった。闇の形状は分からぬが両開式のようである。

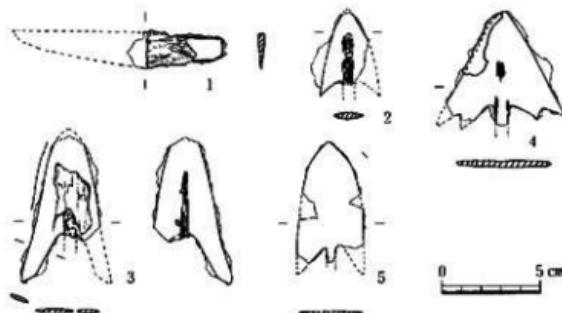
鉄鎌（第20図2～5）

4点出土し、2・3が無茎鎌で4・5が有茎鎌である。いずれも大形のもので、実用品ではなく儀礼用の鎌である。

2は腹抉を持つ三角形の鎌である。全長4.5cm



第19図 北吉田ノノメ4号墳遺物出土状況



第20図 北吉田ノノメ4号墳出土鉄器(1)

を測り厚手の造りである。錐はない。錐身のほぼ中央に4mm×2mmの梢円形の穴がある。その前後には矢柄の木質が両面に遺存しているので、矢本体と鉄鏃を緊縛し固定するための紐を通す穴と考えられる。3は全長8.1cmを測る大形品で、極端に大きな腹抉を持つ三角形の鏃である。その先端は斜めに面取りされているようである。基部近くと錐身中央の二ヶ所に2よりもひと回り小さな穴がある。これも矢本体を緊縛する機能を持っていると考えられる。なお一方間に漆膜が付着しており、胡蘿片と考えられる。

4は全長5.6cmを測り、大形の三角形の鏃で二重の腹抉を持つ。内側の逆刺は下方に突出している。頭部は小さくて偏平である。木質の痕跡は、僅かに認められる。これにも一方間に漆膜が付着している。5は腹抉を持つ柳葉形の鏃で、全長7cmを測る。逆刺は大きいものの頭部は小さい。なお、木質の痕跡はない。

土師器 高坏（第17図6～8）

いずれも3号墳との間の周溝から出土し、出土層位から4号墳に伴うものと考えられるものである。6は坏部屈曲部周辺である。厚手の造りで明確に屈曲するために稜線が走るタイプと思われる。内外面ハケメが施されている。純い橙色を呈し、砂粒と海綿骨片を少量含んでいる。7・8は脚柱部である。ともに同形態で、坏部との接合方法（挿入付加法）も同じである。外面はヘラミガキ、内面はケズリが施されて、3号墳と同じ調整方法である。7・8は純い橙色を呈する。7のほうが砂粒を多く含むものの、ともに海綿骨片を多く含んでいる。6とは別個体である。

須恵器 坏（第17図9）

墳丘東斜面から出土し5号墳に伴う可能性が高い。口径11.1cm、受部径13.3cm、器高3.3cm（推定）を測る。口縁の立ち上がりは内傾し、内面には明確な屈曲線が走る。回転ヘラケズリの範囲は狭く、それ以外はナデによって仕上げられている。

弥生土器 底部（第17図5）

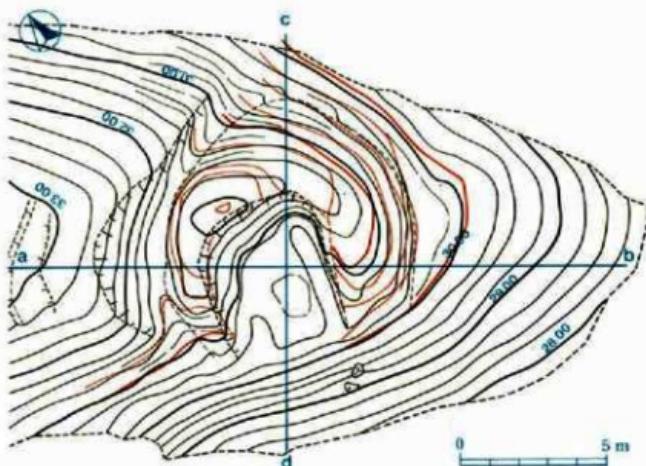
径6.6cmを測る平底で壺の底と思われる。外面はナデ、内面は蜘蛛の巣状のハケが施されている。純い赤褐色を呈し、少量の砂粒と海綿骨片を含む。



第21図 北吉田ノノメ4号墳出土
鉄器(2)

第5節 北吉田ノノメ5号墳

a 墓丘・埋葬施設



第22図 北吉田ノノメ5号墳墳丘図（赤は地山センター）

南東に伸びる支尾根の先端に位置している。山側に弧状の周溝を作り、直径9m前後の古墳である。山寄せのように古墳を造っているので、尾根筋からの流土の堆積のために、墳丘の遺存状況は非常に良い。埋葬施設は、完全に破壊されていたが、板石が散乱していることから箱式石棺であることがわかる。

基本的に、地山削り出しによって墳丘を構築し、墳丘上半のみ盛土を施している。周溝は4号墳の南周溝から約2m離れて弧状に掘削されている。最大の深さは1.2mを測り、群中において最も大規模なものである。これは、群中の他の古墳と違う周溝掘削の方法による。そして、他の古墳は裾を明確にするかのような削り込みを多用しているが、5号墳は、溝を掘り込むことによって墳丘を構築し、周溝掘削土を墳丘盛土に利用している。

墳丘盛土は、灰黄色砂質土あるいは黄褐色砂質土系の土で、部分的に地山ブロックを含んでいる。尾根筋にあたる南東側は盛土の始まるところから1m離れて地山の高まりがあり、あたかも周溝状を呈する。これは墳丘北側の背後でもよく似た状況で、盛土施工前の地山整形がなされている。

墳丘中央から南西にかけて大きな盗掘坑がある。最低2回は被害を被っている。排土は、主に南と北側に放り出され、箱式石棺材としての板石や副葬品の断片が出土した。最も新しい盗掘は太平洋戦争敗戦後、暫くしてなされたことが付近の住民の話でわかっている。その他の盗掘の年代は出土遺物が皆無であるのでよくわからない。ただし、2号墳周辺で青磁碗の破片が出土しているので、本古墳群に遅くとも中世には人の手が入った可能性がある。

b 出土遺物

刀子（第23図）



第23図 北吉田ノメ5号墳出土鉄器

基部と刃部の一部しか遺存していない。基部は、長さ5.0cmを測る。刃部の推定される長さは7cmと考えられ、刃部長に対して基部が長い傾向にある。基部は厚く鏽および木質に覆われているので目釘穴を確認できない。両開式である。

須恵器 壺（第24図1）

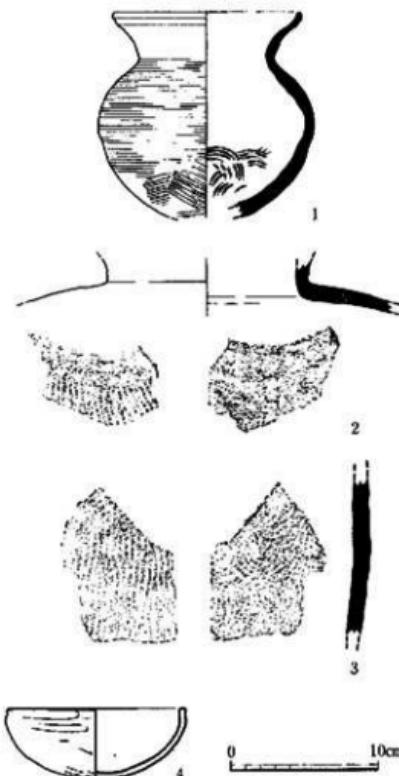
広口壺である。外面には、タタキと粗いカキメ、内面には当て具痕がみられナデが施されている。口縁部は、やや受口状を呈し面を持つ。胎土は砂粒をあまり含まず緻密で硬質である。外面暗灰色を呈する。2・3とは全く違う胎土であり、製作地が異なる可能性がある。

須恵器 壺（第24図2・3）

大形品で2と3は同一個体である。外面はタタキの後カキメ、内面には当て具痕を残している。焼成は悪く軟質で、赤灰色から淡灰色を呈する。砂粒および海綿骨片を多く含んでいる。

土師器 梶（第24図4）

口径11.6cm、器高4.8cmを測る内黒の製品である。口縁端部はやや内傾し、そしてナデによって若干摘み出されたようになっている。外面は部分的にケズリが施され、内外面にわたってヘラミガキが施されている。鈍い橙色を呈し砂粒を僅かに含む。また、海綿骨片も認められる。



第24図 北吉田ノメ5号墳出土遺物
(4の内面のトーンは内黒を示す)

第6節 北吉田ノノメ6号墳

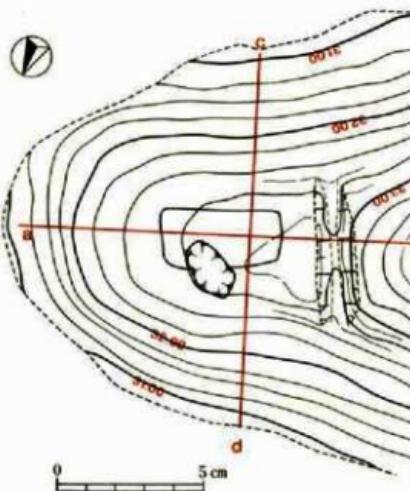
a 墓丘・埋葬施設

6号墳は、3号墳の前方部を利用して造られたと考えられる。尾根筋の山側には周溝があり、幅1.4m、深さ30cmを測る。周溝は、先ず3号墳後円部の方から黄灰色砂質土が流れ込み、次に6号墳の方から暗黄灰色粘質土が流入堆積している。完全に埋ったのは、3号墳方向からの土砂の流入によってである。墳丘北側には、明確なカット面や周溝状の掘り込みではなく、流失している可能性が大きい。第4節でも記述したが、3号墳と同じ盛土を用いている。おそらく本墳築造時には新たに盛土を施していると考えられるものの、墳丘の多くを3号墳の墳丘盛土に依存しているためである。なお現状での盛土は、墓坑状落込みから50cm離れて確認できるものの、これは3号墳の盛土である。

以上より墳形を確定することはできないが、少なくとも10m前後の方形ないし円墳と考えられる。

墓坑状落込みは、周溝から1.2m離れて確認した。長さ4.1m、幅1mを測る。墳丘アゼの断面観察の結果、現状での盛土の最上部から切込まれ、深さ約20cmを測る。多少凹凸は見られるがほぼフラットである。埋葬施設として積極的に評価すべきものはないが、墳丘上の施設であることからその可能性は高い。また、別の考え方として、盛土構等時の作業工程のあらわれとも考えられる。

なお、須恵器小片が北斜面で出土しているのみである。本墳に伴う可能性は少ない。



第25図 北吉田ノノメ6号墳墳丘図

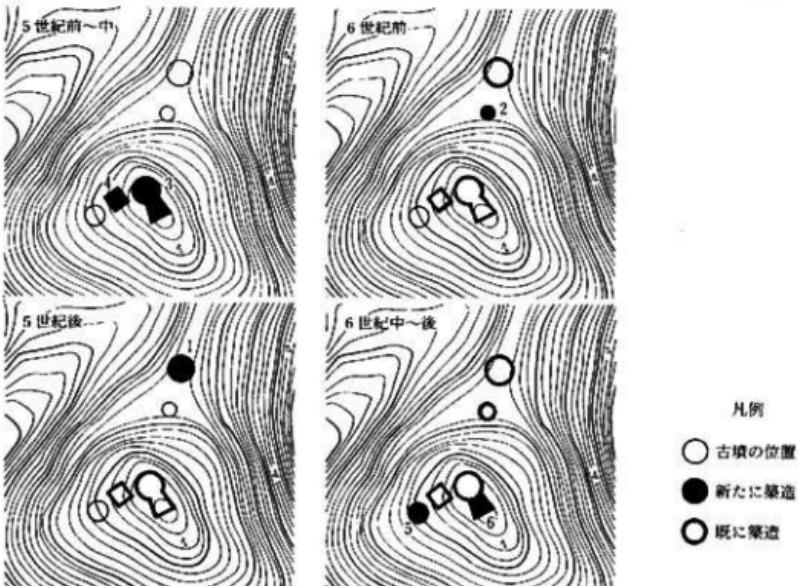
第3章 まとめ

北吉田ノノメ古墳群は、古墳時代中期前葉に築造を開始し、後期後半まで継続するという、息の長い古墳群である。

先ず5世紀前葉近くに前方後円墳の3号墳が造られ、すぐ後に方形墳の4号墳が造られる。それ以降は円墳となるようで、ほぼ一世代ごとの築造となり、単系列の被葬者集団像が想定できよう。築造の端緒となる古墳が、前方後円墳そして方形墳であることは、ある一面で新しい社会への参入、言換れば前方後円墳を築造する社会に参加し、もう一面で旧来の墓制を引きずっている側面を具体的に示すものである。当然の事ながらこれは墳形からみた場合である。

そして、6世紀中頃築造の5号墳は、山寄せに近い位置に墳丘を作り、そのために周溝掘削や墳丘盛土の方法が異なり、他の古墳とは一線を画する存在である。しかも、箱式石棺を埋葬施設としている。つまり、古墳築造の技術に大きな格差が認められ、「横穴式石室」の影響があると考えている。当該地域の横穴式石室では、倉垣丸山古墳が有名で、TK43型式の須恵器を出土している。5号墳とほぼ同時期の築造であり、本地域に、「横穴式石室」という墓制とその思想が入っているので、5号墳のような横穴式石室墳の影響を受けた古墳の存在を肯首しうる。

副葬品は非常に貧弱である。最も豊かな遺物を出土した3号墳でさえ僅かの装身具、4号墳で鉄鎌等の小鉄器で大型品は刀1本のみである。3号墳出土の装身具は出土状態からみて首飾り一



第26図 北吉田ノノメ古墳群築造過程

連で身につけていたものと考えられる。勾玉4個に小玉類というよくみられる構成だが、滑石製品を主にし、しかも祭祀具のひとつである滑石製の臼玉もそれに使用している。さらに富山県小矢部市閑野2号墳出土の臼玉群を報告者は刀の飾りとしている⁽¹⁾。ノノメ3号墳では、首飾りの機能が認められるので、祭祀目的以外に臼玉を使うことが北陸の一つの特色をなしている可能性がある。これは当地域における装身具の僅少からくる玉類の転用なのか、それとも違う意味があるのか資料の増加をまって判断したい。

4号墳の刀は土圧によってかなり曲っているが、折れたという状況ではない。焼入していない刀と考えられ、いわば実用でなく儀礼用の刀といえよう。また、出土した鉄鎌は、大形のもので身の作りも薄く実用とは考え難い。このように、非実用品の埋納がみられる。

以上より、古墳の作り方、大きさ、そして副葬品相から、小集団の被葬者像が想定できる。

堀松から北吉田を中心とする地域は、志賀町域でも古墳の集中するところとして注目される。この地域はまた、旧福野潟から北東に入り込んで小盆地を形成し、七尾湾に通じるルートの入口にあたる。盆地を囲むように清水古墳群（6基）、ノノメ古墳群（6基）、フルワ古墳群（5基）、堀松古墳群（6基）、北吉田古墳群（33基）で、総数55基を数える⁽²⁾。ただし現在の北吉田集落西方の丘陵上には古墳がないようである。前方後円墳は堀松1号墳の30m⁽³⁾を筆頭に、北吉田5号墳の25.5m、ノノメ3号墳の25.6mと全体的に小規模である。その他の古墳にても円墳で20m未満のものが、そのほとんどを占めている。

堀松1号墳とノノメ3号墳が5世紀前半代に築造時期を求めるので、現在のところ当地域の古墳築造の上限をそこに求め、しかもその築造が前方後円墳に限定することができよう。また、北吉田5号墳で箱式石棺が露呈している他、ノノメ5号墳でも箱式石棺でTK43型式の須恵器が出土していることから、少なくとも6世紀代を通じて築造されている。このように5～6世紀にかけて古墳が造られた累積結果として、現在の古墳分布が見られるものと思われる。なお、現在のところ、堀松古墳群東舌状尾根崩落地から、月影期の土器が出土しているので、該期の墳墓の存在が予想されるが、前期古墳との関わりは不明である。

古墳群は、基本的に5～6基の小群で構成され、北吉田古墳群が33基と最も大きい⁽⁴⁾。しかし、分布をよく見ると、1～5号墳、6～19号墳（細分可能）、20～22号墳、23～25号墳、26～32号墳（細分可能）、33号墳にわけることができる。さらに細分できる可能性を考慮すると、他の古墳群に見られるように5～6基の群構成になるのではないかと考える。それぞれに築造時期等に見られる個性があると予想されるが将来の発掘成果に期待したい。すなわちフルワ古墳群では5世紀後半の古墳ばかりで一つの個性と理解できる。

また、明確に古墳群をなさずに小規模な群で構成されることから、個別の違った築造集団であると思われ、その集合体として当地域の古墳群が形成されたものであろう。したがって、河村好光氏が堀松古墳群の報告書中⁽⁵⁾で分類した古墳立地から見た型式分類よりも、地域の中での分布、継続性を考慮しなければならない。

群形成の端緒が前方後円墳で、それ以後円墳が主流を占めること、そして墳丘規模が小さく副葬品が貧弱であるので小集団の有力者達の継続性ある墳墓群としたい。さらに七尾湾に通じる



古 墓 名	古 墓 位	編 号	古 墓 名	古 墓 位	編 号	古 墓 名	古 墓 位	編 号	古 墓 名	古 墓 位	編 号
1 北吉田1号墳	13.5	16	北吉田16号墳	11	31	北吉田31号墳	19	46 フルツ			
2 △ 2号墳	17	17	△ 27号墳	12.5	32	△ 22号墳	13	47 □			
3 △ 3号墳	19	18	△ 18号墳	11	33	△ 23号墳	11	48 □			
4 △ 4号墳	9.5	19	古墳跡地	19	34	圓墳1号墳	全長30	前方後円	49 □		
5 △ 5号墳	11	20	△ 29号墳	15	35	△ 2号墳	12	50 □			
6 △ 6号墳	26	21	△ 21号墳	8	36	△ 3号墳	12	51 ノメ3-6号墳	高さ	前方後円	
7 △ 7号墳	18	22	△ 22号墳	—	37	△ 4号墳	15	52 □			
8 △ 8号墳	9	23	△ 23号墳	17	38	△ 5号墳	18	53 □			
9 △ 9号墳	14.5	24	△ 24号墳	16	39	△ 6号墳	16	54 □			
10 △ 10号墳	15.5	25	△ 25号墳	20	40	圓墳1号墳	13	55 □			
11 △ 11号墳	10.5	26	△ 26号墳	10	41	△ 2号墳	8.5	56 □			
12 △ 17号墳	12.5	27	△ 27号墳	13	吉良長崎	42	△ 3号墳	8	57 大穴4-17号墳		
13 △ 13号墳	15	28	△ 28号墳	—	43	△ 4号墳	8	58 大穴6-7号墳群			
14 △ 14号墳	10	29	△ 29号墳	15	44	△ 5号墳	7	59 鹿沼丸山古墳	14基以上		
15 △ 15号墳	13.5	30	△ 30号墳	14	45	△ 6号墳	10	60 穴式古墳			

第27図 北吉田ノノメ古墳群周辺古墳分布図

ルートの入口にあたるという交通の要地に古墳の立地が見られるのは、旧福野潟南に位置する古墳群とは別集団と示唆する。被葬者像を旧福野潟をめぐる首長に求めるよりも、外浦へのルートに関わる首長達と考えた方が、よいと考えている。そして、これらの古墳群を総称するために旧福野潟入口北側にあることから、福野潟北古墳群としたい。

旧福野潟南に位置する古墳群（福野潟南古墳群と仮に総称）は穴口古墳群（4基以上）、大坂オオバタケ古墳群（4基以上）、大坂城ヶ墓古墳群（14基以上）、二所宮古墳群（6基）、下甘田古墳群（5基以上）で、現在のところ三十数基確認されている⁽¹⁾。そのうち調査等で内容が判明しているのは下甘田古墳群で5世紀中頃から後半にかけての木棺直葬墓⁽⁵⁾、二所宮3号墳（車塚）から埴輪片が採集されているのみである。河村氏はこれらの古墳群の築造開始時期を5世紀前半代に想定し⁽³⁾、そうすると堀松・北吉田地域の古墳群と同じになる。但し終末はわからない。

ところが福野潟北古墳群との相違点は、群中に規模のひと回り大きな古墳を含むことと、前方後円墳を含まない点であろう。福野潟南古墳群の大型古墳は車塚であるが、古墳は平坦な丘陵尾根上にあり、いわゆる小古墳の立地としての尾根に連珠するものと異なる。しかも群中から埴輪の出土も知られ、能登においてその出土の知られる例（水白鍋山古墳、柴垣觀音塚古墳等）から勘案すると、当古墳群の盟主的存在となる。町史で紹介されている採集埴輪は二所宮古墳群出土の可能性が高いらしい。その埴輪は土師質のものと須恵質のものがあり、6世紀前半代のものと考えられる。つまり、群形成途中で盟主墳の出現を迎えることとなり、古墳群内の何等かの変化があったことがわかる。同一丘陵上に消滅した数基の古墳も同じように盟主的な古墳と考えられる。おそらく倉垣丸山古墳に続く首長墓系列と考えたい。

最後に、前方後円墳を含まないのは、福野潟北古墳群と福野潟南古墳群と古墳群築造の契機が違うためと考える。そして福野潟北古墳群は小集団のまま階層分化を発達させることなく後期にいたり消滅し、福野潟南古墳群はその中から福野潟を舞台にした首長を生み出していったと考える。

註

- 1 小矢部市教育委員会「開野古墳群」 昭和62年
- 2 伊藤雅文「志賀町北吉田地域の古墳群調査報告」Ⅰ・Ⅱ 「石川考古」191、192号 平成元年
- 3 志賀町教育委員会「志賀町堀松古墳群」 昭和57年
- 4 古墳数は註1。但し、群中における唯一の発掘調査は昭和29年に行なわれているのみである（上野与一・牧野隆信「石川県羽咋郡堀松村北吉田古墳調査報告」「石川考古学研究会会誌」7号 昭和30年）。その時に複数の古墳を確認し、以後古墳番号がふられているようである。遺跡地図（石川県教育委員会 昭和55年）では13号墳まで記載されている。しかし、それぞれの古墳の位置が定かでないことから、現地での対比が困難なばかりでなく、発掘墳の位置も良くわからないので、旧来の番号を無視して新たに番号を付けた。
- 5 平成元年度に志賀町教育委員会が2基の古墳を調査した。それによると2基とも木棺直葬を内部主体とし、少數の鉄器を認め、TK23型式の須恵器の時期を前後するものである。
- 6 志賀町「志賀町史」資料編 第1巻 昭和49年

図 版

図版 1 航空写真・1号墳

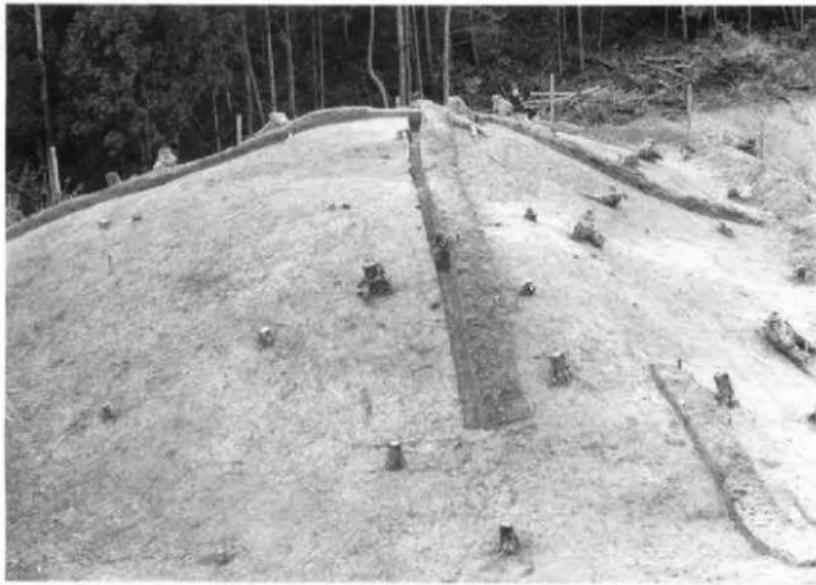


航空写真（西より）



1・2号墳全景

图版 2
1号填



1号填全景



西侧向沟

圖版 3
2号墳



2号墳全景



遺物出土狀況

図版 4
3号墳



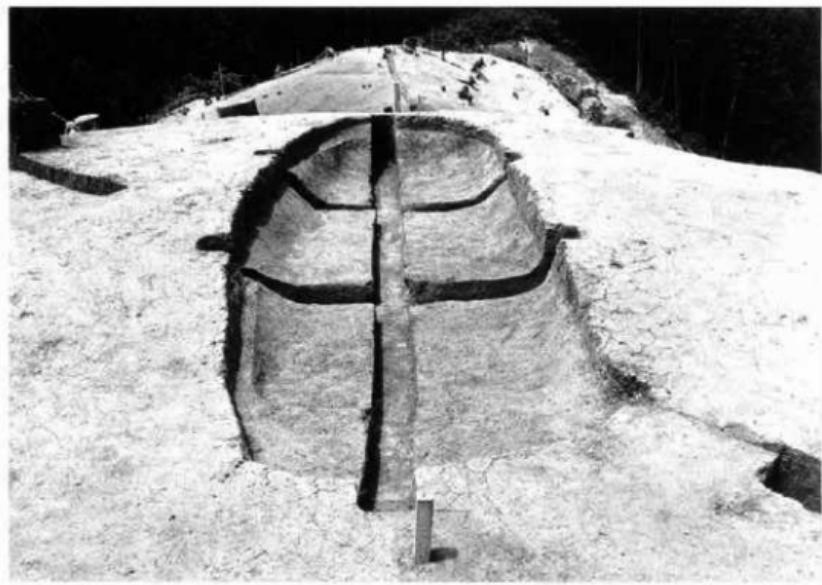
3号墳調査前



3号墳全景

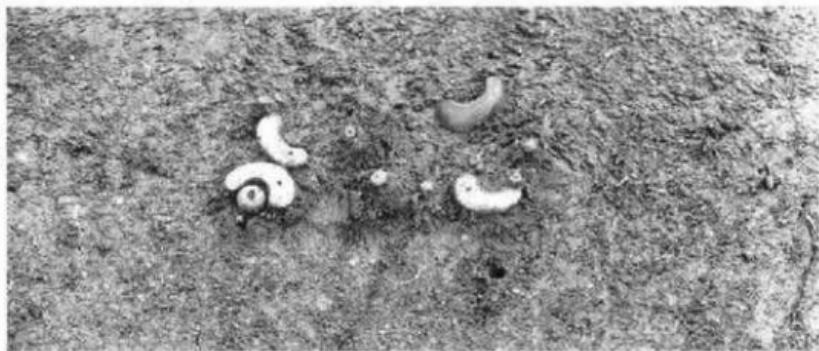


3号填主体部全景



3号填墓坑完掘全景

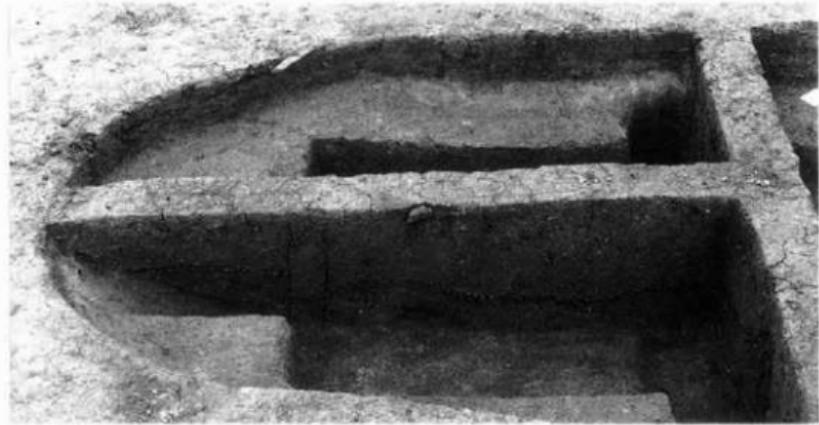
圖版
6
3號墳



主體部玉類出土狀況



主體部檢出狀況

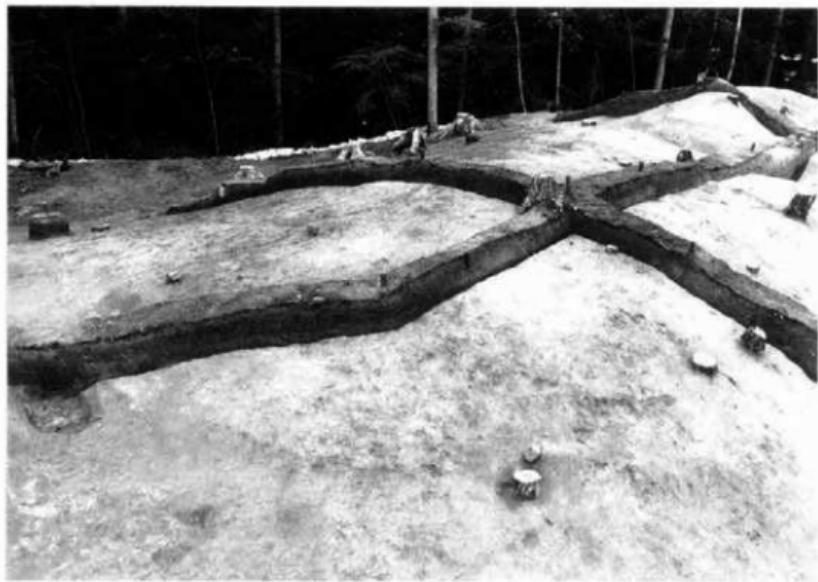


主體部埋土狀況

図版 7
4号墳



4号墳調査前



4号墳全貌



遺物出土状況



北側同溝内ピット



5號墳測查前



5號墳全景



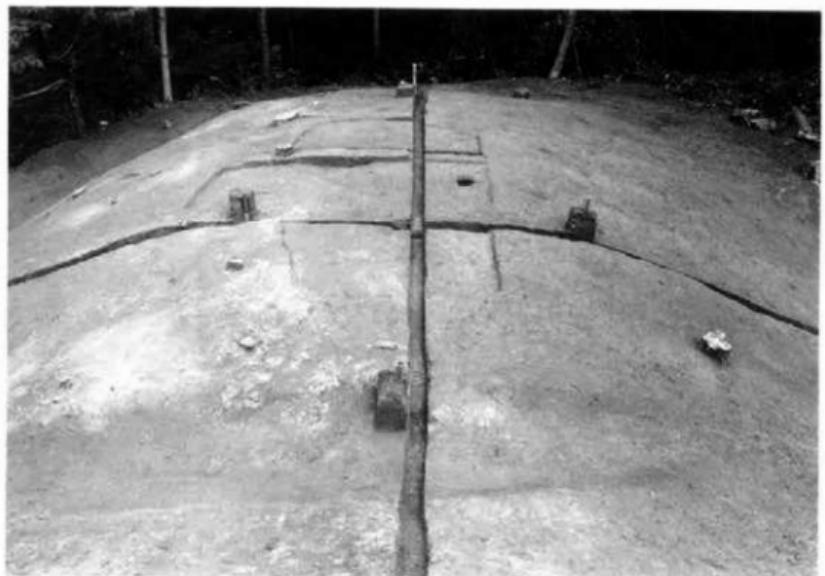
北側周溝



盛土除去全景



6号墳調査前



6号墳全景

圖版
12
6號墳



西側周溝



3・6號墳調査後



3～6号墳調査後



4・5号墳調査後

図版
14
1・2号墳出土遺物



1号墳



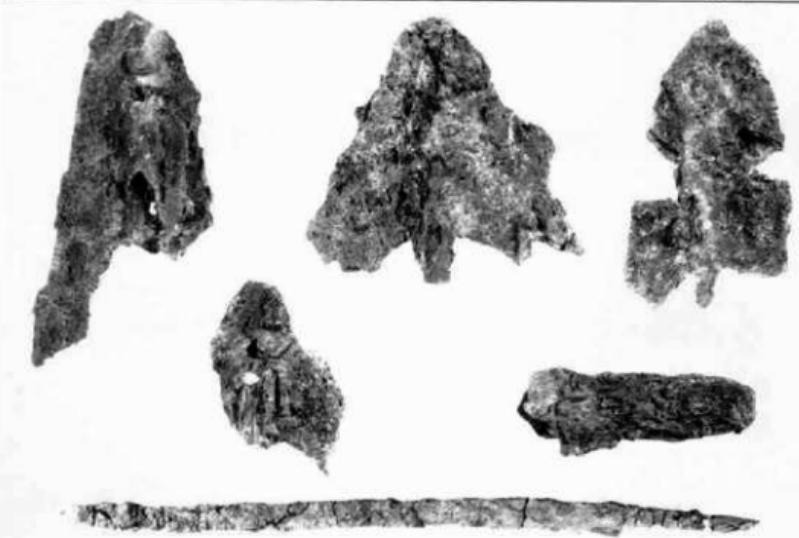
2号墳



3号出土玉類



3·4号填出土土器

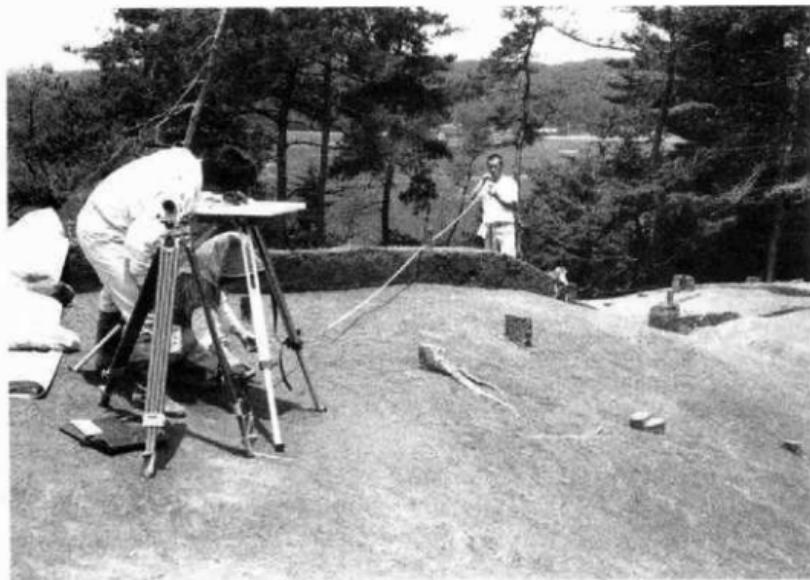


4号填出土鐵器

圖版 16
5号墳出土遺物・等



5号墳



調査風景

北吉田ノノメ古墳群発掘調査報告書

県土幹線軸道路整備事業に係る発掘調査報告書

第1分冊(その1)

発行日 1992年3月30日

編集・発行 石川県立埋蔵文化財センター
〒921

石川県金沢市米泉4丁目133番地
TEL. 0762-43-7692

印 刷 中川大正印刷株式会社
石川県金沢市北安江町447番2号
